

『八月の光』再考

花 本 金 吾

I

1931年の夏に書き始められた『八月の光』(*Light in August*)は、翌32年2月19日に一応の脱稿をみ(注1)、更に訂正加筆されて、その年の10月にニューヨークの Harrison Smith & Robert Haas 社から出版された。31、2年を中心にした前後数年は、フォークナーにとって創作欲の旺盛な、実り豊かな年月であった。29年には1月に『サートリス』が、また11月には『響きと怒り』が出版され、次いで30年10月には『死の床に横たわる時』、31年2月には『サンクチュアリ』、同年9月には最初の短篇集『これら13篇』が出版される、といった具合であった。これらの大作を制作するかたわら、あるものは後の大作に組み入れられ、またあるものは短篇集に収録されたところの多数の短篇も同時に制作した。たとえば31年には好短篇として誉れ高い「乾いた九月」(*Dry September*)や「あの夕日」(*That Evening Sun*)などを含む都合8つの短篇を、また32年には7篇を、そして32年、33年には各々3篇、9篇を、*Scribner's* 誌や *Saturday Evening Post* 紙などを中心とする数種の定期刊行物に発表した。そして35年3月には『標塔』が、次いで36年10月には周知の通りあの大作『アブサロム、アブサロム!』が出版された。

『八月の光』は、『響きと怒り』以来の野心作であった。『響きと怒り』が、彼個人の苦悩をも消滅させるために彼が書かなければならなかった作品であった、と僕が考えているのは既に『響きと怒り』のところで述べた。彼はその作品の制作によって個人的苦悩から解放され、一時的に安らぎを得

た。その結果が、人間真実の追求という彼本来の主題を中心にしたというより、芸術上の効果を狙って書いた『死の床に横たわる時』（作家自身このことを *tour de force* という言葉で繰返している）、それにやや煽情的な効果を狙ったかに思える『サンクチュアリ』となって現れた（このことについても既に各々の作品論の中で述べた）。じっさいフォークナー自身が、『死の床』では『響きと怒り』制作時に感じた充実感を絶えて感じなかったこと、その充実感、歓びを再び体験しようとして『八月の光』に筆を染めたこと、を告白しているのである（注2）。そして『サンクチュアリ』制作の場合にも、不純な動機があった事実を告白している（注3）。

『死の床』で書く歓びや充実感を持ち得なかったのは、一口に言って、その中に人間真実への追求の姿勢のない事実に関係している。彼は自分が既にたしかめ、知っている事柄を、主に手法の面での実験を意識して美的に描き出そうとしただけである。彼の言葉を借りて言えば、「最初の言葉を書く時から、最後の言葉が判っていた」世界を描こうとしたに過ぎないのである。『響きと怒り』直後の解放感にひたる彼にあって、問題意識が一時的に萎えるのは当然であったかもしれない。

だが『サートリス』以後深い目的意識を持つに至ったフォークナーにあっては、いつまでも解放感にひたっていることは不可能であった。『サートリス』や『響きと怒り』で主題としたところの「過去の魔力」の正体が何であるのかもまだ糾明していなかったし、『サンクチュアリ』であばきたてた南部における様々の悪の相——その相の本体への鋭い肉薄も試みてはいない。これらの作品にあっては、あるいは「過去の力」に、あるいは現実の圧力に打ちのめされ、亡んでいく痛ましい犠牲者の群は描かれたが、そうした犠牲者を生み出す本源に鋭い解剖のメスを加える作家の姿はなかった。一口に言うなら、そうした「過去の魔力」や「現実の圧力」は、説明不能なもの、不可解なもの、として描かれている趣きがあった。そしてこのことが、当時のフォークナー自身の認識の限界を示すものであるのは、

いうを俟たない。真摯な作家であったフォークナーにとって、こうした認識の限界を超えたものへの挑戦は、やがて不可避の仕事であった。M. カウリーは、『ポータブル・フォークナー』の中で「サトペンの大いなる計画は、彼がやりたいと思ったものをでなく、ただやらなければならなかったことをやることであった。即ち、彼がもしやらなければ、その為に余生を生き長らえていくことができないと判っていたから、好むと好まざるとに拘らずやらなければならないことをやりとげるのであった。」と、『アブサロム、アブサロム！』の主人公について述べた後、「同様なことはフォークナーについても言える。彼は自分で書きたいと思うものを書くのではなく、好むと好まざるとに拘らず、書かなければならないものを書くのだ」（注4）と言葉をつづけている。この言葉にいささかの誇張はあるにしても、フォークナーの真摯な問題追求の態度、作家としての使命感に貫かれた態度を見事に言い当てた言葉であろう。

では、フォークナーはこの『八月の光』で何を書かなければならなかったか。

この頃の彼にあっては、自分が生まれ且つ育った南部の、過去及び現実に対する明析な認識を獲得することが最も緊急の事柄であった（とはいえ、その裏に一地域の特相を超えて普遍的な人間真実を探求するといふ、究極の夢が存在していたのはいうまでもない）。そこでこの作品で、フォークナーは黒白問題と硬直化した宗教及びそれらの存続を可能にしている類型化した物の考え方などを中心に据え、南部という個有の歴史を持った個有の地域が直面する様々な問題を浮び上らせようとした。しかしこの作品の場合は、『サンクチュアリ』の時ほど、一面的ではない。同時に、彼は、これらの概念が一個の人間にどのように強い影を落とし、それがどのように個を変えてしまうのか、という伝達のメカニズムを一方では解明しつつ、他方において、その翳りをつけられ変質した個が再び本来の人間性を取り戻す可能性があるのかどうか、あるとすればその回復のメカニズム

はどうか、などといった問題までも含めて考えようとした。伝達のメカニズムの解明は、サートリスやコンプソン一家を亡ぼさずにはおかなかったあの過去の魔力の正体を解き明かす大きな鍵となるものであるし、回復の可能性をまさぐり、何らかの光明を認めることは、作家フォークナーの究極の夢そのものであった。この作品にクリスマスとバーデンを中心とするもの、ハイタワーを中心とするもの、及びパイロンとリーナ・グローヴを中心とする3つのプロットがあると一般に考えられるが、その点だけからでも判るように、この作品のカンヴァスは、途方もなく大きいのである。

この作品には技法面から来る困難さは殆どない。『響きと怒り』や『尼僧への鎮魂歌』の中間章をはじめ幾多の作品に見られる、あの彼特有の難渋な文もない。たしかに時間の流れが多角的に切断されているために、いささかの煩雑さは伴うが、それは読者の理解を拒絶するほどの困難さにはならない。5, 6章までに主要な人物があたかも何の関係もないかのように、一見無雑作に描き出されるために、その辺まで読者は、主人公についても主題についても何らかの糸口を見つけ得ないが、そのことは、読者の側にいらだちを惹き起しこそすれ、作品を理解する上での困難さとはならない。第1章は、マーガレットをその祖とし、デルシー、ルービーへと受け継がれて来たカウリーの所謂アース・マザーの1人と見做される純粋ではあるが無教養で自分が瞞されたことをさえ疑うことを知らぬリーナ・グローヴが、ジェファソンに着いた時、小高い丘の上に建っている家が火事になっているのを見る処で終り、第2章に入るとジェファソンのある製材工場で働いているパイロン・バンチという男が登場して、彼と一諸に働いたことのあるクリスマスとブラウンという得体の知れない2人の男のことが回想される。そして土曜日の午後だというのに、唯1人工場に居残って働いているパイロンは、ジェファソンに来る途中彼女の探している男はその製材工場にいるかもしれないという人々の話を確かめそこにやって来たリーナに逢うのである。ところが3章に入ると、まったく別の人物即ちジェファソ

ンの牧師としての職を追われ、爾後世間を捨て唯1人淋しく無為の日々を送っているハイタワーが紹介され、更に4章になるとパイロンがハイタワーを訪ねて行った日の会話が記録されるのである。5章に至るとまた新しい人物クリスマスが登場して来るが、この男が中心人物と判るまでには僕たちはなお読み続けていかなければならないのであって、とにかく5章あたりまでは主人公も作者の意図も読者には判らない。それは、6章から12章までクリスマスの生い立ちが述べられて漸く判って来るのである。このようにこの物語のストーリーを理解するにはいささかの忍耐は必要であるが、いったん理解してしまえばこの作品の描き出す世界を追うことは決して困難な仕事ではなくなる。

にもかかわらず、この作品の主題に関して、未だに統一的解釈が成立していないのは、先に述べたカンヴァスの大きさにその原因があると思う。つまり、3つのプロットがどのような統一的主題を各々どのような形で支えているのか、という点がこの作品の本質的な困難さとなっている。1作品において何らかの統一的な主題が存在するとするのは、小説という1ジャンルだけにとどまらず芸術一般の存在を支える一大命題である。問題は、3つのプロットという大カンヴァスを用いてフォークナーが言おうとしたことは何であったのか、ということである。これら3つのプロットがある時は並行し、またある時はあのフォークナーお好みの対位法的効果を狙いつつ、全体として交響楽的效果を持つよう仕組まれているのは疑い余地がない。そこでこの小論では、先ずそれぞれのプロットがどのような作用と意味を持ちつつ、どのような統一的主題を浮び上らせていくのか、という問題から始めたい。そのことは、「伝達のメカニズム」、「回復のメカニズム」などと先ほど抽象的に述べておいた事柄の意味を明確に浮び上せると同時に、統一体としてのこの作品に対する何らかの批評となる筈である。便宜上、3つのプロットをひとまず切り離して考察を加えたい。

II

<ジョー・クリスマスとジョアンナ・バーデン>

この作品の主題が何であるにしろ、少なくともテーマの上からはクリスマスの生い立ち、その生い立ち故の不可避免的なジョアンナ殺害、そしてその報いとしてのリンチを中心に行っている以上、先ずこの人物を中心とするプロットから始めるのが順序であろう。

ジョー・クリスマスの悲劇は、自然な心理的発達が相矛盾する既成概念をいり濃く反映した環境に阻害され、ねじ曲げられ、やがて諸概念の矛盾相の中に自己の所属場所あるいはアイデンティティを見失ったところに成立する。5章から11章にかけてフラッシュ・バックの形式で語られる彼の過去は、彼がアイデンティティを失っていく経緯を明らかにすると共に、南部社会がかたくなに守りつづけてきた因襲的概念をも浮きぼりにする。彼は、生れながらの悪人として描かれているのではもちろんない。それどころか、彼は、そうした因襲的概念に所属場所を奪われた、哀れな犠牲者として描かれている。5章以降のフラッシュ・バックは、まさにこうした彼の受難の物語にほかならない。

ではその受難の歴史はどうであったか、それはどのような精神を形成するに至ったか。簡略に跡づけておかなければならない。

彼の受難の歴史は、もちろん彼が生れ落ちたその瞬間から始まった、という方が正確であろう。なぜなら、娘ミリーとサーカス団員との恋を認め得ないユーフィーズ・ハインズは、ミリーの分娩の際に医者を雇うことを拒否しその為娘を見殺しにしてしまうばかりか、新しく生れ出た罪もない私生児を孫として、というより先ず人間として受け入れることを拒否し、遂にクリスマスの夜ある孤児院のドアの処に捨て去り、以後は「俺は神の意志を遂行するものだ」という頑迷な信念を持って、あたかも『緋文字』のチリングワースのように、執拗に私生児クリスマスにつきまとして監視し、徐々にこの私生児の無邪気な心をどす黒く染めていくからである。最

初他の孤児たちと天真爛漫に交っていたクリスマスは、常に彼を見つめる老小使いの目を意識するに至り、自分是他者と違っている処があるに違いない、という妄想にとりつかれる。その為に彼は本来の天真爛漫さを失い、孤立して来る。と同時に他の子供たちは、彼を「黒ん坊」呼ばわりを始めて来るのである。これはもちろん、小使いとして孤児院に入り込んでいるハインズ老人のさし金に他ならない。ハインズは、無垢な娘を騙して孕ませるような男は、メキシコ人などではなくて黒人に違いない、と勝手に決めてかかり、白人と少しも変らないこの孤児をも黒人扱いせざるを得ない。更につきつめて言えば、彼は、黒人は悪者であり、社会を毒すものである、という白人である自らを人間的に反省することを徹底的に失った、偏狭で形式的なプレスビテリアニズムの信奉者なのである。そうした彼にあっては、孫への人間的共感よりも、その孫の黒白問題が先ず重要な関心事なのである。パーデン殺害の罪で捕えられたクリスマスがリンチにかけられることを祖父であるこの老人があれほど熱狂的に大衆に訴える姿は、こうした彼の考え方を知る時、はじめて正確に理解される。

しかし彼は、この作品でフォークナーが認識した南部の現実にあって、決して突飛で風変りな存在ではない。人間的共感という本来の宗教が基盤とすべきものを徹底的に失い、その代りに黒白問題に基く「差別」をその基盤に持つ歪んだ宗教——その宗教は、ハインズや養父マックイーチャンにとどまらず、パーデンを殺害するほどの悍猛な男は白人ではなく黒人に違いないという妄想だけで彼を黒人に決めつけてしまう盲動的な大衆すべてによって支持されている。自分の国を守ることと黒人から白人の女性を守ることを殆ど同義に解釈し、クリスマスをナイフで去勢してはばからない熱狂的な愛国主義者（この場合の愛国主義は白人社会だけを含んだ狭いものであるが）パーシー・グリムも、この宗教の恐らく無意識な支持者に他ならない。つまり、フォークナーが認めた南部の現実とは、こうしたいびつな宗教観を持ち、それを発想や行動の形式の基盤にするまで深く信奉

することなしには、もはや安住することのできなくなった、特殊な歪んだ社会なのである。人間のもっとも内的なところに位置する宗教観は、それが歪んでいればいるほど、外的に広がる行動規範、道德規範、社会規範などに、益々大きく歪んだ影を落す。その社会が持つ規範を無視する者、規範の善悪に懐疑の目を向ける者、何らかの理由でその規範へのイニシエーションに失敗した者は、その理由の如何を問わず、時には死を伴った制裁を加えられる。フォークナーが認識する南部は、病根が人間の心の奥深く喰い入った病める社会であった。

オコーナーによれば、ミシシッピーを中心とする現実の南部においては、バプティストの信奉者が1位で、メソディストがこれに次ぎ、プレスビテリアは最も少ない、とのことであるが、その事実はこの場合いささかも重要ではない。統計家とは違う作家が何を真実と見るかは、その作家の自由であるからだ。

さて、ハインズの執拗な目によって触発された自己への疑念は、クリスマスが他の子供たちと離れて孤独になるに比例して、益々深く内向していく。他の子供たちとまったく違わない皮膚の色をしていながら黒ン坊と呼ばれる不思議が、彼が僅かに持ち始めた幼くはあるが純粋な精神活動を混乱させ、自己への自信を失わせていく。黒人呼ばわりされる彼が、黒人の労働者に「黒人になるとはどういうことなの」と聞いて「黒人でなければそりゃ判らねえよ」とどなられる幼い日のエピソードは、自分が何者であるのかを懸命に求めながら、それに失敗し遂に永却に自分の所属場所を失い、アイデンティティを失っていくクリスマスの悲劇を、簡潔にしかも鮮やかに予見させている。ハインズを代表とする白人社会から締め出された彼は、しかし白い皮膚故に黒人の社会にも所属する場所のないことを、鋭くも直観するに至ったからである。

そうした悩める彼の心を一層混乱に陥入れ遂に彼をして反逆的な生に向わせるに至った者は、よく言われている通り、女栄養士アトキンズである。

彼女の練齒磨を盗んだこと、また他者の部屋にしのび込んだことに対して彼が制裁を加えられたならば、彼の精神的混乱はある程度防げたかもしれない。自分が悪かったことを五才の彼は幼いながら純粋な心で理解していた。だが彼が受取ったものは、若いインターンとの恋の戯れを見られたと早合点した栄養士が彼が口外することを封じようとして渡した1ドル銀貨であった。幼い彼は、銀貨を与えられる理由は判らないながら、彼女の行動の裏に何か不純でどす黒いものが存在することを、半ば無意識にしかし鋭く感じ取った。彼女に見られるこうした自己の行動責任を糊塗しごまかす行為は、究極的には南部社会の倫理的墮落の1表象にすぎないが、しかしここで問題なのは、このような墮落や腐敗がクリスマスが悪の泥沼にひきずり込んだということではなくて、墮落や腐敗を持つ社会に激しく反撥し、やがてそれに対して空しいしかし懸命な反逆を試みるに至る、1つの契機となった、ということである。甘えることなどは夢にも思わず、一片の愛情すらも受けることなく育った彼は、5才にして既にある意味の精神的離乳を果していた。信頼し得る指導者や助言者はないながら、というよりまさにその故に、彼は社会を客観視する、いびつながらも独立した精神を自分で確立していた。それは、こうした情況のもとに育つ精神が多くそうであるように、かたくななまでに潔癖な精神であった。

ハインズによって黒白いずれの社会にもパティシペイトすることを阻害され、栄養士アトキンズによって社会に存在する悪を直観させられたクリスマスは、成長と共に益々自己を反逆的なアウトサイダーにしていかざるを得ない。そして彼を徹底的な反逆的アウトサイダーにしてしまったのが、5才のクリスマスを養子にしたマックイーチャンであるのはいうまでもない。労働の価値と神への畏敬を教え込もうとする彼は、しかし自分の信ずるプレスビテリアニズムが今や本来の宗教から逸脱して形骸化していることを理解しておらず、従ってクリスマスの精神を見つめての愛ある教育を行うことはできない。徒らに教義書を一方的に押しつけるに過ぎない。ク

クリスマスの反逆的精神は、養父が振り下す鞭の一振り一振りによって、いよいよ決定的になっていく。

マックイーチャンは鞭を手にして待っていた。「その教義書を置け」と彼は言った。少年はそれを床に置いた。「そこにじゃない。お前は、獣がいつも踏んづけている廐の床が、神の御言葉を置くのに相応しい場所だと思っているんだろう。だがわしはその事も教えてやろう。」とマックイーチャンは冷静に言った。彼は自分で本を拾い上げ棚の上に置いてから、「ズボンを下げろ。ズボンを台なしにはしたくないからな。」と言った。

それから少年は、ズボンを脛まで下げ、短いシャツの下に腿をあらわにしてつっ立った。小さいながら直立不動の姿勢であった。鞭が振り下される時、身じろぎもせず、かすかな震えさえ顔にあらわさなかった。絵に見る僧侶のように、静かでうっとりとした表情で、まっすぐ前を見つめていた。マックイーチャンは、ゆっくりと力を込め、しかし未だ怒りも表わさず冷静に、規則正しく鞭打ち始めた。どちらの顔がよりうっとりとし、平静で、確信に満ちているかをいうのは困難なほどであった。

(注5)

このようにして彼は反抗心を募らせ、潔癖感を強め、ために遂に自己を完全なアウトサイダーにしてしまわざるを得なかったが、しかしそのことは、彼が愛を求め、社会へのパティシペーションを希求しなかった証左にはならない。それどころか、こうした希求は愛に飢え孤独に悩む者のみが持つあの強烈さを持っている。12才の少女アリスに孤児院時代の彼が寄せていた痛ましいほどに純粋な愛を見るがいい。7才年上の彼女に彼は母親の代償を求めていた。彼女が誰かに引き取られて孤児院を去った夜、クリスマスの最初の愛の喪失と失望の歴史が始まり、この点からも彼は自己

閉塞的になっていくが、それでも 17 才の時売春婦ボビーに裏切られるまでは、矢張り同胞への復帰の希求を完全には捨てていない。いや、もっと正確に言えば、裏切られた後で南部から北部へ、また北部から南部へと14年にも亘ってさすらいの旅を続けるのは一口に言って、そうした彼の希求が受け入れられる場所だけを求めての空しい彷徨にほかならなかったし、運命の女性バーデンを殺害するあの最後の瞬間に至るまで、彼はその夢を捨て切っていない。

たしかに彼がマックイーチャンに養子として引き取られる5才の時までには、養母の優しい態度を率直に受け入れられないかたくなさを持つに至っていたのは事実である(といっても、このかたくなさは、今まで常に冷たく扱われて来た者が急に情愛や同情をかけられる場合に一時的に抱き易い強度な反感、つまり「俺を泣かせようとしていやがる」(注6) という感情、獰猛な夫にまったく無力な女性に対する反感、つまり「俺をそれほど可愛いのなら、どうして俺にもっと優しくするよう夫に言わないのか」という感情、また彼女の示す優しい態度が規律を無視して、彼を甘やかすだけにすぎないものであることに対する潔癖家としての怒り、などが複雑に絡み合った結果のかたくなさにすぎないのであり、従ってこのかたくなさは受け入れられたい彼の希求をパラドキシカルに、しかし強烈に表現するものにほかならない)。

疎外感を抱く若者が、復帰の夢を自分の愛する異性を通じて果そうともがくのは、極く人間的な行為であろう。他のあらゆる人物に何らかの意味で連帯感を持ち得なかったクリスマスが経済的にも精神的にも彼にでき得るすべてを尽して売女ボビーに連なろうとする努力は、だから自己の所属場所を完全に失いかけた彼が黒白の規範を超えて人間的に生きるための最後のあがきなのである。彼はいわば復帰への夢をすべてボビーにかけたのであった。ボビーは、精神の奥底まで腐れ切った売女でしかないが、彼女を知るまで女性に関する経験を持たない潔癖家のクリスマスにそのことが

判る筈もない。彼女は背が低いから他の異性たちに受け入れられることはないだろう、と彼は勝手に思う。つまり彼は、彼女が彼と同様社会に受け入れられないと思うことによって、彼女との間に強い親近感を抱くのだ。ここらあたりにクリスマスの孤独な魂の敗者意識や劣等感を読み取ることができる。

彼が彼女を自分のものにしようと企てたことがあるとすれば、それは彼女の身の矮小さの為なのだ。あたかも彼女の矮小さが他の男達の掠奪的な目から彼女を守り、彼だけに言い寄るすきを残しておいたかのようだった。もし彼女が大きな女であったなら、彼が言い寄るようなことは決してしなかっただろう。彼は恐らく、「そんなことをしたって無駄だ。彼女は、もう誰か他の奴のものに違いないのだから。」と考えたに違いない。(注7)

自分で勝手に彼女の中に同質性を見出し、1つのイメージを作り上げたクリスマスは、全存在をあげて（といってもそれは無意識的にであるが）彼女を真面目に愛していく。だから、彼女が他の男と寝ているのを偶然に知った彼が、次の逢引で彼女を殴打するのは、真実の恋慕を抱く恋人が感ずるのと同質の嫉妬からだし、自分には黒人の血が流れているのかも知れないと彼が吐く言葉も、決してサディスティックな意味を持つものではなく、真面目に愛し合う者同志がするように、自分の罪なり欠点なりを予め告白しておこうとする、真摯な言葉に他ならないのである。

彼女にかけた夢が遂に無残に挫折した瞬間に、復帰の夢は断ち切られてしまった。夢の実現によってやがて1個の精神の中に統一体として定着すべき可能性を秘めていた内なる混沌は、遂に混沌のままクリスマスの心に残されることになった。つまり、ハインズや女栄養士、マックイーチャン夫妻などの歪んだ圧力によって準備された歪んだ精神は、永遠に矯正の機

会を失い、その歪みの軌跡を辿りつつ益々歪みを大きくしていきやがて人非人のそれに様相を変えていく以外に道はなくなってしまった。

このような経緯でその性格形式をなし終えたクリスマスは、現実の面で黑白どちらの規範にも属し得ず、いわば2つの規範が接し合う処に沿って、ある時は白い規範に、またある時は黒人の規範に反逆を繰返しつつ、彼独自のいびつな行動規範を作り出していかざるを得ない。この規範が、希望する前に既に挫折を知り、復帰への希求を抱きながらより強く反逆へ向わざるを得ないという、完全にインテグリティを失った以後の彼の内的二重性あるいはアンビヴァレンスを基礎とする規範であるのは、いまさらいうまでもない。「やつは、黒ン坊のようにも、白人のようにも振舞わなかった。そうなんだ。そのことが人々をあんなに怒らせた。」(注8)ということになるろうとも、もはや彼にはどうにもならないことであった。こうした彼自身の規範こそ、彼の生きる規範そのものであったのだから。

さて、南部という特殊な地域の妄想によって作り出されたこの被害者クリスマスは、長い彷徨の末、この特殊な地域の妄想が作り出したいま1人の被害者ジョアンナ・バーデンにめぐり合う。この運命の女性を知ったのは、彼が30才の時であった。クリスマスがやがて彼女を殺害しなければならなかったのには、一体この2人の間にどのような決定的なドラマがあったのか。そしてそのドラマに南部はどのような影を落しているのだろうか。

彼女はジェファソンの町はずれの大きく古ぼけた家に、ジェファソンの人々との交際もなく、「よそ者」(stranger)としてひっそりと唯1人淋しく暮している。彼女の家に入出入りするものは、わずかに黒人だけに過ぎない。それもその筈で、彼女は密かに黒人に助言を与えたり、黒人学校や施設を援助しながら暮しているのである。北部ユニテリアンの父によって徹底的に白人の黒人に対する罪の意識を植えつけられ、黒人を救済し白人が贖罪することの必要を教えられた彼女は、遂に人間としてまた女性として生きていく権利を奪われた人間に成長した。つまり、彼女は、ちょうど

クリスマスが南部の頑迷なプレスビテリアニズムによって平和に生きる権利を奪われたと同様、北部のユニテリアニズムによって正常な生を奪われた犠牲者に他ならなかった。彼女が幼い日に父からそうした歪んだ宗教観をどのようにしてたたき込まれたかについては、彼女とクリスマスが恋人になって、愛の葛藤を中心とするいわゆる第1期も終りに近づいて、彼女が漸く男に服従する決心をしたかのように今まで一度も訪ねたことのないクリスマスの小屋にやって来るある9月の夜、クリスマスに長々と語るのである。

奴隷制度を否定するユニテリアン派の熱烈な信奉者であった祖父は、奴隷問題のことである男と議論した末その男を殺し、北部を去り、妻と5才になる長男とを連れて西方に旅を続けた。彼は至る処で政治を語り、奴隷制度と奴隷所有者とを非難し、酒に酔って帰った夜などは、長男と3人の娘（その頃には彼には4人の子供があった）とを次々とたたき起して、「お前たちに2つの事を憎むよう教えてやろう。それが習えないようなら叩きのめしてくれる。2つのことというのはナ、地獄と奴隷を持った人間共じゃ。判ったか。」(注9)とか「俺が手足の動かせる間は、お前たち4人にありがたい神様を叩き込んでやる。」(注10)と奴鳴りちらし、また家にいる時はいる時で、誰1人理解できないスペイン語の聖書を読んできかせるのである。こうした環境に反逆を試みて家出をする長男のナセニエル（ジョアンナの父）は、しかし父親の影響を捨て切れないばかりか、父の考え方を強く是認するに至って、ジュナという妻とカルヴィンという子供を連れて再び家に帰って来る。そしてジョアンナのこの異母兄カルヴィンと祖父の2人が黒人投票権の問題で、元奴隷所有者サートリスに殺されたのは、この異腹の兄が20才になったばかりの頃であった。ジョアンナの父は、日が暮れてから誰にも悟られぬよう2人の遺体を森の中に埋めた。その時の事を回想してジョアンナはクリスマスに次のように言う。

その墓はたとえあなたが行ってご覧になっても見つからないでしょう。なぜってその夕刻おじいさんとカルヴィン（兄）の遺体を運んで帰って来た父は、充分暗くなってから遺体を埋め、墓のありかを隠すため塚をならしてその上に藪や何かをかぶせておいたからです。彼らに見つけれ、掘り出され、遺体を害われないようにね。それほどこの人たちは私たちを憎んでいたのです。私たちは北部の人間ですから、よそ者であったのです。いや、よそ者よりもっと悪く、敵であったのです。（注11）

そして彼女が4才で漸く物心がつき始めた頃、父に連れられて2人の墓の前に佇んだ時に父の言った言葉が、遂に今日の彼女を作り上げてしまったのであった。それは、彼女にとってそれほど強烈で恐い言葉であった。

これから言う言葉は憶えておくんだよ。お前のおじいさんと兄さんはあそこに埋められているが、彼らはたった1人の白人に殺されたのではなくて、おじいさんや兄さんや俺やお前が考えることもできないほどずっと昔に、神様が白人全体におかけになった呪いによって殺されたのだ、ということをナ。白人は、犯した罪の為に破滅の運命と呪いをかけられている人種で、この運命と呪いは、白人である俺やお前のお母さんや、それから未だ子供ではあるがお前の上を、いやお前だけじゃなく今までに生れて来た子供、これから生れて来る子供など、すべての者の上を蔽っているってことをナ。誰1人としてこの呪いから逃れることはできない。（注12）

この恐い白人を蔽う黒い影の幻から逃れようともがく彼女に向って、父は、さらに言葉を加えて、「逃げられはしない。もがかなければならないのだ。立ち上るんだ。だけど立ち上るには、その影をも立ち上らせなければならぬ。だけどその影をお前の高さまで上げることは決してでき

ないだろう。(中略)だが影から逃れようとする——そりゃできない相談だ。」(注13)と、この呪いから逃れる道のないこと、しかも黒人を白人の処まで持ち上げることの殆ど不可能なこと、その苦しみを白人の宿命として強く担っていかなければならないことを、唆すのである。

クリスマスが放浪の果て食物を求めて彼女の家に忍び込んだ頃の彼女には、自分の身を空しくして、白人が黒人に対して犯してきた罪の償いをすることを自分の宿命として受け止めている殉教者としての、心の平和と密かな歎びとさえがあった。とはいっても、彼女は、現実の面では南部のプレスビテリアニズムと、内面的には北部のユニテリアニズム(カルビニズム)との両者によって、自由を奪われた二重の枠におし込犠牲者に他ならなかったのは、やがて彼女の生が、人間らしさや女らしさを求めて、あの激しい反逆を求めるのを見るまでもない。

さて、では2人の愛のドラマはどのようにしてあの悲劇へと向っていったのであったか。

彼女の殉教者としての落着きと、一見男を馬鹿にしたような態度とは、彼と肉体関係を結び出して1年を経てもなお崩れてはいない。夜、暗闇の寝室で触感だけで知る彼女と、昼間目で見える彼女とは、2人の全く異った女性ではないかと感じざるを得ない彼は、したがって女を征服し得ない自分の無能さや不甲斐なさに腹立たしくなり、「女のことはもうよく知っていると思っていたのに、じっさいはたいして判ってはいないんだ」(注14)と思わざるを得ない。所謂第1期は、このように2人は、あたかもどちらが愛によって先に征服されるかをかけた、葛藤の時期のようであった。だが1年を経て、即ちこの小説によれば第2期に入って、30年間も無視され続けて来た彼女の肉体が堰を切ったように烈しい復讐を開始しだして、彼女が持して来た殉教者としての心の平和も歎びも押し流された時、この葛藤は終る。この時期は、だから彼女にとってたとえそれが呪われた地獄の炎であっても、その炎にこの夜が最後とばかりに、かなり変態と思えるほど

に激しく情欲を燃すことのできる時期であり、彼にとっては、長い侮蔑の後で漸く征服の歓びを持って女を愛せる時期であった。尤もこの時期においてすら、彼は週に1度はメンフィスで売女を抱いていたし、また1人で物想いに沈む折、自分の前を走っている淋しい通りをみつめながら「今過しているのは俺の生き方じゃない。俺はこの地には属していないんだ。」(注15)と考えたり、自分を底なしの泥沼に吸い込まれていく運命の男として、ある距離において自分を眺めたりするのであるが、こうした一見矛盾した行動や思考は、クリスマス自身にもどうにもならない二重性を考慮に入れれば、容易に首肯できるところであろう。常に相反する2つの概念に引き裂かれ、正から負へ、負から正へと漂泊しなければならぬ彼の分裂性を理解すれば、それにも拘らず、彼が運命のあの日まで彼女の元を去らなかった理由は、1つには未練であり、居心地よさであったろう。33年の間彼を受け入れてくれた人物は、この女性をおいてなかった。彼女は、今までのところ何らの束縛や責任を加えることなく、彼を愛し、受け入れ、しかも必要としている。去ろうと思えばいつでも去れるという気安さが、逆に彼を彼女の元に留めさせたとも言えるが、それ以上に彼を人間として受け入れる最初の人にあって心の安らぎを得ていたことの方が大きい意味を持っているよう。

だが彼らがまぎれもなく第3期——即ち2人の恋の終局と彼の殺人へと突進した時期——に入っただのは、彼女が今までの自己の罪ほろぼしと同時にその罪を正当づけるために、彼に結婚を迫り始めた時においてであったが、その時でさえ彼は、去っていこうとしないのである。「明日はここを出よう」と考えながらも、「だがどちらも折れようとしなかった。もっと悪いことに彼らは互いに相手を放っておけないのだった。彼は出ていくことさえしなかった。」(注16)と述べられるほどに、2人は互いのことに係わりすぎていた。

ここらあたりから2人のドラマはいよいよ宿命的な悲劇性を帯びて来る。

彼女が彼に結婚を迫ったのは、先程も述べたように、1つには今までの自己の罪ほろぼしであったが、また同時に黒人をも人間と認めようとしてきた彼女の主義からでもあった。彼女の趣味趣向に拘らず黒人に殉ずることが、彼女の魂の救済にとってもっとも必要なことであったから、彼はどうしても黒人でなければならず、またその黒人と結婚することが絶対に必要であった。なぜなら、結婚生活こそは、他の人間と交わりあう社会的行為の中でもっとも親密で重大な意義を持つ行為であるからである。彼女が如何に黒人学校を援助し、個々の黒人に助言を与えようとも、自己の生活の根底において黒人を許し、共に交わりあう生活がないならば、それは虚偽の生活であるし、虚偽の生活を営むところには、彼女の魂の救済は望むべくもない。こうした一見殉教者然とした彼女の心の奥底に、自分の罪を結婚によって正当化し、なお愛欲の炎を燃そうとする、ひどく利己的な心の動きが、分ちがたく潜んでいるわけであるが、そのことを彼女は必ずしも明確に意識してはいない。

だがこの彼女の結婚の望みは、男のきっぱりとした拒絶によって、簡単に打ち碎かれてしまう。すると、彼女は、彼を黒人の学校に通わせ、教育をつけた後で、現在自分がやっている仕事をすべて彼にやらせようとするのである。この気持の動機は、表面的には、結婚を諦めた彼女が、黒人の男に恩義を売り、その恩義によって男が今度は他の多くの黒人に働きかけることを希うところにあるが、僕たちは、この相変らず殉教者然とした言動にも、恩義を男に売ることの中に罪を正当化し、また男に他の黒人に働きかけさせることの中に自己の体面保持を考えようとする女性の利己性を読み取らずにいられないのである。つまり、クリスマスは、バーデンの魂の動の底救済の必要性から一方的に作り出された「黒人」であったといえる。彼女の苦悩の根元は、意識するしないに拘らず、自分の罪を償うことと黒人への殉教者たらんとすることの2つを、1人の人間を通して一挙に、しかも破綻を見せずに解決しようとしたところにある。

このように一方的に決めつけられることへクリスマスが反撥するのは当然であった。33年の間常に黒白2つの生活規範や道徳によって虐げられてきた挙句、「生きることは反逆することだ」という人生観を持つに至っていた彼であった。押しつけや哀願が強くなればなるほど、彼の反撥もその強さを発揮していく。彼女が自分の犯した罪を償い、しかも白人全体が黒人に犯してきた罪をあがなうためには、黒人クリスマス以外彼女にはいなかったわけだが、そのクリスマスは、彼女のあらゆる願いを拒絶していく……。

そして永久に和合のできなくなったこの2人のドラマは、クリスマスのバーデン殺害と放火によるバーデン家焼失によって、遂にその幕を閉じる。だが、クリスマスの心の遍歴がそこで終るわけではもちろんない。それどころか、この心の遍歴こそは、バーデン殺害以後の10日間の出来事を扱ったこの作品の主題と分れ難く結び合っている事柄の1つなのである。それこそは、いま1人の犠牲者ハイタワー牧師を通して、明るくおおらかな「八月の光」たるリーナという存在とかかわりあい、また対比される事柄なのである。

彼の心の遍歴を辿る問題は、今も述べるように主題と深く結びあった事柄であるので、ここでは触れずに直ちにハイタワーについて考察を進めることにする。

＜ゲール・ハイタワー＞

彼が過去の魔力の犠牲者であったのは、いまさというまでもないが、彼の場合の過去は、あのサートリスやコンプソンを亡ぼさずにはおかなかった過去の魔力とは、いささか趣きを異にする。サートリスやコンプソンが、現実に零落するにつれて益々過去の栄華を巨大なものにしていき、遂には自分が勝手に作り上げた大きな過去の陰影に押し潰される——というある意味で一面的で単純であったのに反して、ハイタワーの場合は、ことはもっと複雑である。

彼は、父と母、それに黒人の召使女、という3つの亡霊によって過去の
中に逃避する人間になった。父は「教会を持たぬ牧師、敵を持たぬ兵士、
そして敗戦〔＝南北戦争〕に際しては勝者、負者を結び合わせて医者——
外科医になった男」(注17) であって、性格に統一性のない優柔不断な男で
あった。ハイタワーが8才の10月、屋根裏の部屋で、従軍中に父が着て
いたフロック・コートに青い北軍のつぎはぎが当たっているのを発見して烈
しい衝撃を受けた時、父に対する最初の懷疑の念が起ったと見られる。父
は「1つの言葉が北部から浸透して来る以前から奴隷廃止論者」(注18) で
あって、黒人の手でのべられたベッドに入らないばかりか、食事も口にし
なかった。「奴隷を所有する方が所有しないよりももっと経済的であった
時代と土地に生れ」(注19) ながら、奴隷なしで生活する現実には、少年の目
に厳しく映った。父が50才を過ぎ、母も40の坂を越してから生れた彼は、
痩せこけた軀をいつも病床に横たえている母を常に見ながら成長した。母
は、現実を無視し範疇だけに生きる父の犠牲者としてしか、少年の目に映
らなかった。黒人を使わず、従って農作物も作られず、隣人が見かねて差
し出す食事すらも妻が受るのを拒んで、ただ「神が授け給う」というばか
りの父であった。「神が何を授けて下さるの。たんぼばや溝に生える雑草を
ですの」と不満をぶちまける妻に対して、「その時には、神はそれを消化
するお腹なかを下さる」(注20) という父であった。本来の宗教から逸脱し、ヒ
ューマニズムを失った、プレスビテリアニズムの犠牲者でしかない父は、
このようにして母を病弱にし、少年の心を灰色にぬりつづした。

彼〔＝ハイタワー〕と彼女〔＝母〕は、ちょうど洞穴の中の巣にいる
ひ弱い、小さな2匹の動物のように、四面を囲む壁の中に住んでいた。
彼ら2人にとって他者であり、殆ど威嚇でさえあった父は、その中に時
折現われてきたが、その度ごとに2人の内臓の正常な機能は阻害され、

精神の働きにも変調をきたした。彼は、まさに他者以上の者——敵であった。(注21)

この2つの亡霊が、幼いハイタワーの心に、現実とは悲しく、恐ろしいものだ、という決定的な認識を与えてしまった。そして行き場のなくなった彼の心に素晴らしい夢を見させる役を演じたのは、もちろん黒人の女中である。彼女は、繰返し、彼の祖父が「数百人の」敵を殺す程の大胆で豪毅な人物であった、と物語るのである。つまり、彼女は、彼を過去にとらわれた人物にする上で決定的な役割を演ずる案内役であった。

現実にはその住み場所を失った彼の魂が、しかし現実を生きていく必要上選んだ現実逃避の場所は、神学校であり、その延長の教会であった。「彼が神学校へ行き、それを自分の天職として選んだのは、それが自分の目的をかなえてくれるから」(注22) だった。彼の目的とは、彼が生れる20年前勇敢であった祖父が疾走する馬上から射落されて戦死した場所——ジェファソン——に行き、祖父の霊との合一をはかることにほかならない。そしてこの目的をさらに合理化するために、彼は、実に一人よがりの、エゴイスティックな抽象化を行うのである。「だが彼が信じていたのは、それだけではなかった。彼は教会そのものを信じていた。教会から分れ出たり、教会が呼び起すあらゆるものを信じていた。もし避難所があるとすれば、それは教会であろう、また真実が裸のままでも羞恥も恐怖もなく歩くことができる場所があるとすれば、それは神学校の中においてであろう、と静かな喜びを感じながら信じて」(注23) いたのである。こうした言葉は、南部の歪んだ宗教を批判する言葉になっている以上に、ハイタワーが利己的な目的を合理化するために考えた思考のメカニズムを伝えるものであろう。彼自身が誰よりも本来の宗教的精神から逸脱しきっているのである。

現実を遮断する避難場所に身を置きつついちずに過去と合一をはかろう

とする彼の主義が、妻を絶望の淵に追いつめ遂に自殺させてしまい、またジェファソンの人々をして彼を教会から追放させるに至るのであるが、彼はそうした利己主義に基く罪、他者に対する自己の責任を回避した罪といったものを、あの最後の場面で思考の大きな輪がゆっくりと回転し出すまでまったく意識してはいない。パイロンという無教養ではあるが善良なヒューマニストの要請に従って、不本意ながらリーナの赤児を取り上げ、外界の現実には様々な事件が起っていることの中にはじめて自己の連帯性や責任といったものを認識するまで、彼は完全に利己主義の殻の中に自己をうずめて、温々と過去との合一だけを糧として生きていたのである。

彼がこの利己主義の殻の中にもぐり込むためには、数々の人間を犠牲にした。先ほども触れたように、彼の妻はそのもっとも痛ましい犠牲者であった。2人の間は愛が芽生えた最初の頃、彼が一時的に過去だけを見つめることから現実の相の中に息づく妻を見つめたのは事実であった。しかし彼はやがて再び過去の虜となった。その後の妻の行動は、彼との間に心の絆を失った彼女が自己の全存在をかけて他の男たちとの間にそれを求めようとした悲しい絶望の行為であった。彼の教区の人たちも彼の犠牲者であった。神の言葉を聞こうとする蒙昧ながら善良な彼らは、南北戦争の英雄伝をしか話さない彼を、遂に教会から追い出さなければならなかった。しかし彼はこの時、自己の罪を静かに反省する代りに遂に自分が犠牲者であるかのような振舞をするのである。彼をジェファソンから追い出そうとするいろいろな迫害を耐えることの中に殉教者ですらある姿勢を取るのである。

彼はそれが起る前に感づきながら、自分の思考からそれを隠していたもののことを思い出す。彼には剛毅と忍耐と威厳を一つの賄賂として提供し、まるで殉教者のようなふりをして説教壇を放棄したように見せかけている自分自身が見える。ところが実際は、その時の彼の内には、写真屋がシャッターを切った時、前にかざした讚美歌の本のうしろに隠れ

ているから安全と思いこんで自分を裏切ることになったその顔のうしろに、踊り上らんばかりに得々としてこみ上げてきた拒否の思いがあったのである。(注24)

こうした言葉は、もちろん、完全に過去との合一をはかることができるように現実との間に厚い壁を作ろうとする利己心のあったことを描写するものにほかならない。

過去に退行していたその彼が、バイロンによって再び現実呼びもどされ、リーナの出産の時にくり上げられる人間的な場面を目撃して、自分の非を悟り、やがてヒューマニズムに目覚めていくのであるが、このヒューマニズムの目覚めの経緯はこの作品の主題と深く結びあったところであるので、後ほど再度触れることになる。

このヒューマニズムへの蘇生があったからこそ、彼は、「みなさん方、聞いて下され。あの男〔＝クリスマス〕はあの晩この家にいたのです。……」(注25)と嘘の供述をして、クリスマスパーシー・グリムから守ろうとするのである。

だが、彼は、人間的な目覚めを行動の原理として生きていくためには、余りにも弱い人間であった。20章で漸く人間性に目覚めながら、その直後で再び過去の幻に吸いこまれていく件をどう解釈すべきかで、批評家の意見はまちまちである。しかし彼の人間的な弱さを理解すれば、自分の認識の強さにも拘らず、それを原理として行動し通していけない自分の弱さを、祖父の強さで代償しようとする、それまでの思考形式が癒されがたく彼を支配しているのを、容易に理解することができるのである。「ハイタワーは、よりよくなろうとする意志にも拘らず、弱い人間であった」(注26)というフォークナーの言葉をここで引用するまでもなく、作品に描き出されたハイタワーの像がそのことを十分に証明するであろう。彼の真の苦悩は恐らくこの時点から始まるのではあるまいか。人間性を認識した彼が、ど

のように自己の弱さを補いつつ、その認識を原理とした行為をしていくのか、という問題こそは、ハイタワーに限らず、作家フォークナー自身の大きな問題でもあったからだ(そのために「勇気」とそれに基く「行為」が、個のヒューマンイズムを横に拡げていく上でどれほど必要なものであるのかについての確信は1948年の『墓場への闖入者』あたりで漸く明確なものになっていくのである)。

III

以上、南部という特殊相が生み出したいろいろなタイプの犠牲者の群を見つめてきたのであるが、私は、急いで、これらの人物が作品の主題にどのように結びつくのか、そしてその主題を通して作家が描き、訴えようとしたものは何であったのか、それは果して所期の効果を挙げ得ているのか、また主題の分裂性がこの作品の欠点としてよく挙げられたが果してそうであるのか、などといった問題に進まなければならない。

『八月の光』と言えば、クリスマスの余りにも強烈な悲劇性の故にクリスマスの物語だけを中心に論じすぎるといふ誤ちを犯しつつけては来なかったろうか。それがこの作品の構成の上で1大クライマックスを成しているのは疑うべくもないが、だからといってそれがこの作品の主題とはいえないのではないか。クライマックスと主題とがただちに一致しないのは、クライマックスをより大きな事実の1表象として考えるフォークナーにあっては、普通の事柄である。従って僕たちは、クライマックスを可能にする、むしろ薄められてはいるが広汎な現実の相(作家が認識する相)がそのクライマックスのうしろに存在していることを読み落してはならない。

この作品の主題は、「この物語は主にリーナ・グローヴの物語です」という作家自身の言葉を引き合いに出すまでもなく、リーナが存在と深く結び合ったところに存在する。クリスマスをはじめとして生を否定的乃至は消極的にしか生きていない人物に救いは果してあるのか、という問題と究

明において結び合っている、といい換えてもいい。リーナは、物語の上では、従の存在でしかないながら、主題の上では主人公的存在なのである。デルシーの後裔であるこのアース・マザーの存在を通してこそ、フォークナーは、不条理な生の条件に喘ぐ犠牲者の群——それは人類全般にまで拡大され得る——の救済の夢をかけている。

「八月の光」という題名の句は、善と悪、光と闇、生と死などの対比をいろいろと想起させるものであろう。だが、僕は、この句に関してフォークナー自身が語った言葉、つまり「ミシシッピーでは8月の中頃になりますと、突然秋を感じさせるような、涼しくて、光がなごやかで、あたかも現実のというより古い昔から戻ってきたかのように、光が輝きを増す日が数日あるのです。どこか光の中にギリシャやオリンポスからの半人半獣神が神々がいるのではないかという感じなのです。それはほんの1日か2日続いて消えてしまいますが、私のところでは毎年8月に起ります。あの題名の意味はそれだけのことで、それはわれわれのキリスト文明よりも古く輝かしい時代を思い出させる点で、私には面白く味わいのある題名に思えたのです。」(注27)(~~~~線筆者)という言葉の意味するものを率直に信じたのである。彼がギリシャ悲劇や神話にどの程度影響を受けていたかなどについての批評がよくなされているが、そうしたことの究明はフォークナー研究のある過程で必要と認めつつも、そのような外面的な公式論だけで、徹底的に個性的でかつ独創的であったフォークナーの本質に迫れるものではないし、いま僕がここで問題にしようとするところのものではない。ここで信じたいというのは、人間が創造された太古の昔に豊かに持ちながら、やがて文明の発展と共に失ったかに見える、牧歌的なおおどかさ、純情さ、信じやすさなど、一口に言ってしまうと、フォークナーが人間を人間たらしめるものとして最も価値をおこうとした「人間らしさ」あるいは「ヒューマニズム」といったものの存在を8月のなごんだ陽の光の中に直観し、その存在をリーナという人物に定着させようとしたのだ、ということであ

る。つまり、「八月の光」はリーナの謂に外ならず、フォークナーは、この光に暗黒の中によどむ南部の救済の可能性を見出そうとしたのだ、と考えたい。この光は、第1章で大きな臨月の腹をかかえ、牧歌的な雰囲気を漂わせながら、暗黒の南部に入って来るが、最後の21章でも、相変わらずおどかな雰囲気をたたえたまま去っていくのである。違っているところは、最初に比べて豊かになった点だけである。豊饒さを象徴するかのように乳呑児をかかえ、またその人間らしさが人を動かす大きな力となることを象徴するかのようにバイロンという従者を従えて……。

フォークナーが、この光の指向する方向に南部の、いや人類の救済の可能性をまさぐろうとしていたと僕が考えるのは、既に述べた。そこで、その光が南部を通過する中で、それがどのように反射し、屈折して、どのような可能性を浮び上らせたか、また光が辿りつく最後の地点には何があるのかなどといった問題の吟味が、その次の課題となろう。このことを具体的に言えば、リーナが存在によってクリスマスやハイタワーなどの人物がどのように変ったか、ということであり、リーナが存在はフォークナーのいかなる思想や期待を荷うものであるのか、ということになる。

では、リーナという光は、どのような暗黒面を照し出し、また変えていったのか。

彼女の持つ信じ易さや恐怖のなさがどれほど個々の人間の間に作り上げられた不信の壁を自然に取りこわし、人々を安心させ変えていくかは、バイロンの例を見るまでもなく、あの宗教的に小うるさいアームステッドの妻マーサが、リーナをふしだらな女として追い出してしまいう代りに、ねんごろにもてなすのを見ても明らかである。彼女は、行く先々で人々の心のやましさをやたくなさを、やわらかく照し出す。

彼女は、先ず善人の新教徒バイロンを徹底的に自分の従者に変える。というより、他のあらゆる登場人物よりも南部のねじ曲げられた物の考え方に染っている度合の少なかった彼は、最初からリーナにもっとも近い存在

であったから、彼女を見た瞬間に、彼の方から彼女に近づいていったのである。この人物は、たとえば『村』や『町』のミシン売りラトリフの場合と同様に、作品中で1人の人物としての働きを荷わされているかたわら、物語をつなげる纏め役、つまり物語構成上の必要から生み出された人物ともなっている。そのためリアリティを完全に付与された人物とはなり切っていない憾みがあるが、彼の作品中での働きは非常に重要である。なぜなら彼の働きを通してのみ、リーナの光が他の主要人物に反射し、屈折し、伝達するからである。

その伝達の方法を更に具体的に見ておく必要がある。この点にこそ、この作品の分裂性が云々される当否があるのだから。

ハイタワー牧師がパイロンの手引きによって現実に蘇生し、同時に真に生きることの責任を認識するに至った点については、既に述べた。その認識へは一足飛びに到達したのではもちろんない。数度に及ぶパイロンの訪問のうちに、自己のまわりにめぐらしていた筈の過去の殻が崩される危険を何度も感じて、彼は怒りと恐怖と不安の言葉を叫ばずにはいらなかった。そしてリーナの出産の場での人間的交感の美しい場面を見せつけられた瞬間に、遂に彼は生れ変わったのである（そのことも既に触れた）。

ところがクリスマスは、リーナにもパイロンにも1度も会うことなく死んでいる。リーナの光はクリスマスには及ばなかったのか。

しかしリーナという光は、パイロンからハイタワーへと通過し、ハインズ夫人へ屈折し、確実にクリスマスに到達している。第16章でパイロンは、クリスマスの祖父母ハインズ夫妻を伴って牧師を訪ねて来るが、それは、クリスマスが生れてこの方孫が自分の足で歩くところを見たことのない祖母ハインズ夫人が、1度だけでいいから1人で歩くところを見たい、そのためにハイタワーに、「殺人のあった晩クリスマスは自分の家にいた」という一寸した嘘の供述をしてほしい、と依頼するための訪問であった。この時の牧師は isolation の崩壊を身近かに感じてはいたが、まだ人間性の

回復はしてはいない。ただ「わしはそんなことをしたくないんだ!」(注28)と喚くばかりである。だがその場とリーナ出産の場との両方に居合せたハインズ夫人は、ハイタワーの中に起りつつあった大きな変化を認めた。つまり、彼女は、かつて牧師の職を追われたこの男が今や真に神の使いとして生れ変わるのを読み取ったわけである。そしてその彼女は、希望というには余りにも淡く、夢というには余りにも儂いながら、しかしある種の信念を持って、クリスマスにハイタワーの館に逃げ込むようし向けるのである。

はた目にはどう映れ、とてつもない事をしかし真面目に説得しようとする祖母ハインズ夫人を見て、恐らくクリスマスは、生れてはじめて、しかもただ1度、本当に他者を信ずる気になったのではなからうか。彼は一時的にしる祖母の言葉を率直に信じて、脱獄し牧師の家に向うのである。だが彼が祖母の言葉を率直に信ずるためには、つまり、リーナからバイロンへと受けつがれた光が彼の中に一時的にしる受け止められるには、一方において彼自身の中でそれを一時的にしる率直に受け入れるだけの心の準備が必要であった。その準備は次のような経緯でなされたと考えられる。

黒白の2つの規範にひき裂かれて遂に徹底した人間不信を抱いていた彼が、はじめて他者への繋りを意識させられたのは、バーデンの握りしめていたピストルに2発の弾丸が込められていた事実によってであった。第12章の終りで「彼女自身と俺を射つつもりだったんだ」(注29)とつぶやく声は、他者から逃走して孤独になればなるほど、彼の心の中に内攻し、池に投げ入れられた小石が描く波紋のように、心いっばいに拡がっていく。南部の観念によってねじ曲げられた存在でありながら、彼女はなお命を賭して彼を愛していたに違いない、という考えが、逃走中の絶対的孤独の中で強くなっていく。他者にわずらわされずに絶対的個人になり切ること——それが反逆児クリスマスの少なくとも表面的な夢ではなかったか。しかしその理想の状態になり切った時、彼の心に起ったものは、深い満足感ではなくて、人は1人で生きることが耐えられない、という連帯復帰への願望

であった。彼は、絶対的孤独という極限の状況の中ではじめて、連帯の必然性を認識したのである。彼が繰返し「今日は何曜日だね」(注30)と尋ねる言葉は、人間社会の中に復帰しようとする彼の懸命な願いの象徴的表現にほかならないし、「自分は30年というもの、この輪から外に出たことはなかった」(注31)と考える意味も、漸くにして黒白の規範を超えたところに人間存在の価値を見出したクリスマスの懺悔のつぶやきでしかない。抵抗することなく捕われる姿勢の中には、過去の行為の責任を取ることの中に救済の途を想定している者の姿がある。一週間の逃亡生活は、彼を一挙に成長させたが、そのためには、既に述べたように、バーデンの2発の弾丸の持つ意味は大きい。その意味ではバーデンの死でさえまったく無意味な死であったといい切れないものがある。

このようにして心の準備をなし了えたクリスマスは、祖母の言葉を一時的に信ずるわけであるが、それはまさに一時的でしかなかった。33年間彼の行動を支えてきた思考形式はあまりにも強すぎる。牧師のところに辿りついた時のクリスマスの分裂した行動を、ギャヴィン・スティーヴンスは第19章で、彼が持っていたかもしれない黒い血と白い血のためだと説明しているが、それは、具体的な血を意味するものではもちろんなくて、具体的な血を核にして作り上げられた2つの規範——その規範にひきちぎられたクリスマスの悲劇性を意味するものである。

以上述べてきたように、リーナを中心として読んでいく時、そこに豊かな対照や屈折、反響などが大きな交響樂的效果を挙げながら、1つの主題を浮び上らせていくのを理解するのである。作品としての纏まりの強弱を云々することはできても、纏まりのなさを云々することはできないと思う。フォークナーが認識した硬直な南部の現実と、その救済を希ってながく作家の姿を、「夥しい描写」を含むこの作品は明確に描き出しており、それは美しい秩序と調和とを保って高い芸術性を主張している。

IV

ところで、リーナが進んでいく究極のところにフォークナーは、一体どのような価値ある倫理体系を求めようとしていたのであったろうか。また、リーナが存在がパイロンをはじめ幾人かの人間を内的に変革したが、その変革が起るのは何によってであるのか、そのメカニズムはどうなのか。こうした問題が明らかにされない限り、個人の救済は遂に個人だけの救済にとどまり、それは社会の、また人類の救済に拮据する可能性を閉ざしてしまうことになり兼ねない。

だが、この究明に向かう姿勢は、まだこの作品にはない。これらの問題は、そっくりそのまま後の問題として持ちこされた。『響きと怒り』では、いわば陰の声でしかなかったデルシーは、この『八月の光』ではリーナとなって作品の倫理観を支える主要人物になっており、その辺ではフォークナーがこの人物により積極的な価値を置こうとしているのを読み取ることができるが、それでも、後期の、たとえばナンシーやギャヴィンなどのヒューマニストが持っていたような強い信念や明確な認識はまだ彼女には与えられていない。彼女を、やがてあの人間性不滅の信念へと通じていくところのフォークナーの倫理体系を荷う人物とするためには、フォークナーは、先ほど述べたような問題をいくつも解決しなければならなかった。

リーナは、たしかにパイロンを変え、ハイタワーを人間的に蘇生させ、間接的にクリスマスに救済の可能性を与えた。クリスマスのリンチの場に居合わせた人々に、永却に消えることのない罪の意識をさえ与えた。

それ〔＝黒い血〕はまるで打ち上げられたロケットから飛び散る火花のように、彼の血の気の失せた体からはほとばしるように見え、その黒い血の爆発と共に、男は上に舞い上って、まわりの人々の記憶の中に永却に入り込んでいくように思えた。彼らがどんな平和な谷間にしようと、

どんなに静かで落着いた古い流れの側に佇もうと、また子供のどんな輝いた顔を前にしようと、古い凶事と将来の希望について考える時は、きっとこの男のことを思い出すだろう。それは必ずそこに、じっと考え込み、穏かに、不動のまま、色あせることもなく、特におどかさというのでもなく、ただ1人落着きはらい、ただ1人勝ち誇りながらいることであらう。(注32)

このように変改への可能性を見せつつも、しかしじっさいはこの作品で新しいことは何も起りはしない。クリスマスが殺される日に新しい生命(リーナの兄)が芽生えるという事実の中に、フォークナーがある価値あるものを暗示しようとしているのは確かであろうが、それは、何の解決にもならないし、説得力もない。それは、当時のフォークナーの力の限界を指すものにすぎないであろう。リチャード・チェースが、『アメリカ小説とその伝統』の中で「何らかの方法で、[この作品に見られる]象徴主義は、生が死を通してやってくること、新しい精神生活がジョー・クリスマスの死を通してジェファソンの町に訪れることを示さなければならない。ところが、そのようなことは何ら起らない。(中略)ジョー・クリスマスという人物において、われわれは主人公の死と復活を祝うことができないのである。」(注33)と述べる言葉は、この作品にみるこうした制限を見事に言い当てている。

しかしこのことが、作家が辿った人間追求の旅を振り返る時、当然の結果であったのは、既に述べたところである。こうした問題の追求こそは、それ以後のフォークナーの仕事であった。そしてそれは、後期においてさえ、『モーゼよ、往きて下れ』などで見せた袋小路にはまり込む危険性——個人の善意は遂に連帯につながらないかに見えた——を孕みつつも、漸く『墓場への闖入者』あたりから1つのゆるぎない信念として結実していったのである。(注34)

そのためには、フォークナーは更に追求の旅を続けなければならなかつ

た。このような普遍の問題に立ち向うまえに、彼は、しかし『サートリス』や『響きと怒り』などで光を当てた「過去の魔力」、『八月の光』で掘りおこした、宗教に端的に現れているねじ曲げられ、とらわれた観念、等々そしてその下にあって、それらの存在を可能にしているもの、等々をいま一度総力を結集して見きわめておく必要があった。そしてそれが1936年のあの大作『アブサロム、アブサロム!』となって結実したのは、いうまでもない。

Notes

1. ミルゲイトによれば、『八月の光』の原稿の最後の頁に「1932年2月19日、ミシシッピー・オックスフォード」と記されているという。M. Millgate: *The Achievement of W. Faulkner* (Random House, 1964) p. 33
2. このことについてミルゲイトは同書の中で次のように述べている。
In the unpublished autobiographical piece..., Faulkner said that the ecstasy he had then [=when he wrote *The Sound and the Fury*] experienced did not recur when he wrote *As I Lay Dying*..., but that he had hoped to recapture it in writing *Light in August*... (同書 p. 33)
3. フォークナーは「金儲けを考えて書いた」という主旨のことを、モダン・ライブラリーの『サンクチュアリ』の序文で述べている。しかしこの言葉を額面通りには受け取れない理由がある。そのことについては拙稿「『サンクチュアリ』について」を参照願いたい。
4. *The Portable Faulkner*: ed. Malcolm Cowley (The Viking Press, 1961) pp. 17-18
Sutpen's great design was "not what he wanted to do but what he just had to do, had to do it whether he wanted to or not, because if he did not do it, he knew that he could never live with himself for the rest of his life." In the same way, Faulkner himself writes, not what he wants to, but what he just has to write whether he wants to or not.
5. *Light in August* (Penguin Books, 1960) p. 113
McEachern was waiting, holding the strap. 'Put it (catechism) down,' he said. The boy laid the book on the floor. 'Not there,' McEachern said, without heat. 'You would believe that a stable floor, the stamping place of beasts, is the proper place for the word of God. But I'll learn you that, too.' He took up the book himself and laid it on a ledge.

'Take down your pants,' he said. 'We'll not spoil them.' Then the boy stood, his trousers collapsed about his feet, his legs revealed beneath his brief shirt. He stood, slight and erect. When the strap fell he did not flinch, no quiver passed over his face. He was looking straight ahead, with a rapt, calm expression like a monk in a picture. McEachern began to strike methodically, with slow and deliberate force, still without heat or anger. It would have been hard to say which face was the more rapt, more calm, more convinced.

6. *Ibid.*, p. 128

She is trying to make me cry.

7. *Ibid.*, p. 130

It was because of her smallness that he ever attempted her, as if her smallness should have or might have protected her from the roving and predatory eyes of most men, leaving his chances better. If she had been a big woman he would not have dared. He would have thought, 'It wont be any use. She will already have a fellow, a man.'

8. *Ibid.*, p.

He never acted like either a nigger or a white man. That was it. That was what made the folks so mad.

9. *Ibid.*, pp. 182-3

'I'll learn you to hate two things, or I'll frail the tar out of you. And those things are hell and slaveholders. Do you hear me?

10. *Ibid.*, p. 183

'But I'll beat the loving God into the four of you as long as I can raise my arm.'

11. *Ibid.*, p. 187

'You probably can't find them, anyway. Because when they brought grandfather and Calvin home that evening, father waited until after dark and buried them and hid the graves, levelled the mounds and put brush and things over them..... So they would not find them. Dig them up. Maybe butcher them..... They hated us here. We were Yankees. Foreigners. Worse than foreigners: enemies.'

12. *Ibid.*, p. 190

'Remember this. Your grandfather and brother are lying there, murdered not by one white man but by the curse which God put on a whole race before your grandfather or your brother or me or you even thought

of. A race doomed and cursed for its sins: Remember that. His doom and his curse. Forever and ever. Mine. Your mother's. Your's, even though you are a child. The curse of every white child that ever was born and that ever will be born. None can escape it.'

13. *Ibid.*, p. 191

You cannot. You must struggle, rise. But in order to rise, you must raise the shadow with you. But you can never lift it to your level... But escape it you cannot.

14. *Ibid.*, p. 177

How little I know about women, when I thought I knew so much.

15. *Ibid.*, p. 194

This is not my life. I don't belong here.

16. *Ibid.*, p. 210

Yet neither surrendered; worse: they would not let one another alone; he would not even go away.

17. *Ibid.*, p. 356

The father who had been a minister without a church and a soldier without an enemy, and who in defeat had combined the two and become a doctor, a surgeon.

18. *Ibid.*, p. 355

The son [=Gail's father] was an abolitionist almost before the sentiment had become a word to percolate down from the North.

19. *Ibid.*, p. 351

...in an age and land where to own slaves was less expensive than not to own them,...

20. *Ibid.*, p. 351

'God will provide,' he said.

'Provide what? Dandelions and ditch weeds?'

'Then He will give us the bowels to digest them.'

21. *Ibid.*, p. 357

He and she both lived in them like two small, weak beasts in a den, a cavern, into which now and then the father entered—that man who was a stranger to them both, a foreigner, almost a threat: so quickly does the body's wellbeing alter and change the spirit. He was more than a stranger: he was an enemy.

22. *Ibid.*, p. 359

He went there, chose that as his vocation, with that as his purpose.

23. *Ibid.*, p. 359

But he believed in more than that. He had believed in the church too, in all that it ramified and evoked. He believed with a calm joy that if ever there was shelter, it would be the church; that if ever truth could walk naked and without shame or fear, it would be in the seminary.

24. *Ibid.*, p. 368

He remembers that which he had sensed before it was born, hiding it from his own thinking. He sees himself offer as a sop fortitude and forbearance and dignity, making it appear that he resigned his pulpit for a martyr's reasons, when at the very instant there was within him a leaping and triumphant surge of denial behind a face which had betrayed him, believing itself safe behind the lifted hymnbook, when the photographer pressed his bulb.

25. *Ibid.*, p. 349

'Men! Listen to me. He was here that night.'

26. こうした主旨の言葉は何度か述べられているが、たとえば *Faulkner in the University* (ed. Gwynn & Blotner p. 45) では次のように言っている。

—Hightower was a man who wanted to be better than he was afraid he would. He had failed his wife. Here was another chance he had, and he had failed his Christian oath as a man of God, and he escaped into his past where some member of his family was brave enough to match the moment.

27. *Faulkner in the University* p. 199

28. *Light in August* (Penguin Books) p. 294

'It's not because I cant, dont dare to,' he says; 'it's because I wont! I wont!'

29. *Ibid.*, p. 215

'For her and for me.' he said.

30. *Ibid.*, p. 254

'What day of the week is this? Thursday? Friday? What?'

31. *Ibid.*, p. 249

When he thinks about time, it seems to him now that for thirty years he has lived inside an orderly parade of named and numbered days like fence pickets, and that one night he went to sleep and when he

waked up he was outside of them.

32. *Ibid.*, pp. 349-50

It seemed to rush out of his pale body like the rush of sparks from a rising rocket; upon that black blast the man seemed to rise soaring into their memories forever and ever. They are not to lose it, in whatever peaceful valleys, beside whatever placid and reassuring streams of old age, in the mirroring faces of whatever children they will contemplate old disasters and newer hopes. It will be there, musing, quiet, steadfast, not fading and not particularly threatening, but of itself alone serene, of itself alone triumphant.

33. R. チェース 『アメリカ小説とその伝統』 p. 298 北星堂。待鳥又喜訳。

34. この辺のところは拙稿「往き暮れた個人の善意——『モーゼよ、往きて下れ』の場合」と「個人と社会との和解——『墓場への闖入者』について」を参照願いたい。